
熱

福田 きな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

熱

【Zコード】

Z5321C

【作者名】

福田 きな

【あらすじ】

私がまだ本当に小さかった頃の、ことの想い出。私は今でもハッキリと思いだせる。大切なことの一度きりの想い出だから。

(前書き)

私・・とわ誰の事がわかるはずです。『デスノファンなら・・。これ
わDEATH NOTEの』を相手として使わせていただきました
が、まったく物語自体は作者の妄想・・想像・・瞑想・・(え??)
勿論、私とはニアの事です(・・・)

私がまだ本当に小さかった頃、一度だけしに抱っこしてもらつた事がある。

しはヒョロヒョロで、でもその腕は力強くて安心した。鎖骨の浮き出た細い身体なのに、凄く強い意思とか、その天才の魂とか、色々伝わってきて、泣いてしまったのを覚えている。

漠然としていたけれど、子供心にしは凄いんだなって思った。

しは泣いている私の顔をじっと覗き込んだ。細い腕で私を持ったまま前に出し、私をじっと見ていた。

しの目はなんだか不思議で恐い。全てを見透かされそうで、私の事を見ているはずなのに、もっと違う何かを見ているようでもあった。

恐いけど、私はしの目が好きだつた。

しは猫背だけど、身長は多分凄く高かつたと思つ。180cm以上は絶対あつた。

顔は、格好良くはないのだろうけど、私は好きだつた。私は無条件で、しを格好良いと思っていた。でも多分、それはいろんな意味でワيمーズハウスの子供なら皆同じ。皆しの何所かしらを格好良いと思っていたんだ。

私はしの黒髪も好きだつた。私は金髪だし、猫毛だから、しの真直ぐな黒い髪が少し憧れだつたんだ。でもしが私を抱っこして、私の金色の髪を撫でてくれた時、私は自分の髪が金色で良かつたと思ったんだ。

しが死んだつてロジャーから聞いた時、本当は悲しかつた。涙は出なかつたけど、本当は大声で泣けるほど悲しかつた。

ひとりで部屋に帰った後、Lの色々な事を想い出した。

その姿も、声も。

細い背中とか、細いのに強い腕とか、鎖骨とか。ヨレヨレの服を着ていたな。黒い髪に黒い、光のない眼をしていたな。

いつも裸足だったな。頭が良くて素敵だったな。

でも、いつもひとつそりとだけ、悲しそうだった。淋しそうだった。

何より私が覚えてる……というより、忘れられないものがある。

Lに抱っこしてもらった時に伝わってきたもの。

強い意志や魂や、それらの何より強烈に、今も私の体に覚えているもの。

ぬくもり。

Lは、あつたかかった。
本当にあつたかかった。

Lの胸、Lの腕、Lの手の中で、私の全てに流れ込んできたその熱さは、今も私の全ての細胞の核になつていてると思う。

Lを尊敬する、そのハッキリとしたきつかけだ。

Lのぬくもりこそ、私がLを手指す理由になる。そのくらい、Lはあつたかかった。

でもやつぱりそれも、ワイミーズハウスの皆が同じだと思つ。

抱っこなんてされたことない子だって、どこからLのあつたかさを感じ取つていたはずで、皆それに向かって生きてきてるはずだから。

私がLに抱っこされたいたら、メロが横から「自分も」とすがつ

てきた。

私は「の腕を離れ、メロが次に抱かれた。

見上げた「は、はるか遠く、本当に高い所にいる人だった。

これが「を本気で目指し始めた時の話。
「を肌で感じた1度だけの想い出。

(後書き)

読み終わり、ムカついてしまった方、申し訳ありませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5321c/>

熱

2010年10月10日00時04分発行